

聖日集会 聖書講筵

人生の原点——ピリピ書から——

1992年9月6日（京都）

奥田 昌道

私共の歩み パウロとピリピ教会の絆 パウロの改心 キリストによりて誇る 信仰生活の原点
本来、無一物 エン・クリスト パウロの一切の秘訣 キリスト一切

●私共の歩み

おはようございます。9月6日といいますと、特に私共には思い出の深い日です。覚えていらっしゃるかも知れませんが、次女の恵子が生まれましたのが1967年9月6日です。25年になります。ちょうど今から5年前の87年も9月6日は日曜日で、そのときにここで話した事を、四国の森下兄が総て文字化して下さっています（四国キリスト召団だより「ともしび第」126号〜第152号）。森下兄は5年前のものを随分感激されて、文字化なさって下さっています。5年前といえましょう、私の書物、債権総論の下巻が出来上がった年でもありました。その感想なども9月13日に話したのですが、それも書いて下さいます。

ちよつとその中から、

「やきほどお話にあつた恵子が生まれたのが1967年、20年前です。その頃に集會が非常に盛んでありまして、防音装置をしてあるのは、梅村兄の祈りがあまりにもやかましいから、両隣から苦情が出てきました。梅村兄の祈りは神様から与えられた祈りで人の祈りではない。その祈りを制限するのはいけない。それじゃ、祈りができるように造りかえれば良いというので、防音工事をしアルミサッシを

全部入れました」（第164号）

そういうことで、とても集會が祝福されました。これを聖日集會でお話したのが、5年前です。ちょうど、5年後の今日、日曜日ということ、とても感謝なのです。

1967年といいますと、8月の下旬に御殿場^{ごてんば}で夏季特別集會がありました。それで、御殿場の集會から帰つて来て、1、2日経ち、9月になつてから、1、2、3、4日と4日間毎晩、4回の集會のテープを、ピリピ書1章から4章を毎晩この下の部屋でほんの二、三人の兄弟達と一緒に聴きました。特に家内が身重^{みおも}でしたので、家内にも聴いてもらおうということで、下の部屋で一緒に一晩一つずつ、テープを聴いてお祈りした。それで、9月4日に第4回を聴いた直後から家内は胸が苦しくなり、すぐ横になりました。9月5日は雨戸を閉じて、一日臥^ふせておりました。四日毎晩、祈祷会をした後のことですから、私など



は何も心配しませんでした。そして、その次の明け方、陣痛が始まりまして、京大病院に駆けつけました。直ぐに赤ちゃんが生まれたのですが、未熟児でございました。1540グラムで、保育器の中に八週間、保育器を出て一週間、63日ぶりに病院から退院したと思います。そして、大和屋旅館の秋の特別集会に参加したのを覚えています。ご承知と思いますが、昭和42年頃に、未熟児網膜症もうまくが開始しました。私は何も知らなかった。酸素の濃度が少し濃すぎると目に悪い、少なすぎると命が危ないあぶ。命を取るか、目を取るかという二者択一を迫られる状況だということが後から分かりました。私はその頃は何も知識がありませんので、医師に任せきっていたわけです。よくあの頃、お話をしたと思うのですが、予定日より2か月ほど早く、未熟児で生まれてきました。体重が普通の子供さんの半分しかありません。見たら、本当に骨と皮だけなのです。当時、弘野淑子姉が住み込んで、手伝って下さっていました。横山良子姉が京大病院の看護婦さんをなさっていました、よく訪ねて来ては励まして下さいました。未熟児で生まれたことを私がややがっかりしていますと、弘野姉が

「生まれたんじゃないですか。生まれたのですよ。それがすべてですよ」

と励まして下さいました。横山姉は入院前の朝、

「ひよこが生まれる幻まぼろしを見ました。だから、赤ちゃんが生まれます」

ということを、私におっしゃいました。それで、医師に聴きますと、

「三日が山です。この赤ちゃんに本当に生命力があるならば、三日間生き延びるこ

とができれば大丈夫です。でも、生命力の弱い子だったら、三日間でだめになり

ます」

と、医師はおっしゃいました。もちろん家内は病院に入院していますから、私達はみんなでこちらで本当に祈りました。

長女が生まれたときは割合順調でしたから、名前も欲張って「裕美ひろみ」と付けました。「裕美」の裕は裕福の裕で、物質的にも精神的にも非常に裕ゆたかでひろやかで伸び伸びと、それから美しいという大変欲張った名前です。

それから、二番目の子供のときは私は何も思いません。ただ、これは主の恵みによって生まれました。8年も間があいていましたし、本当に恵みによって生まれました。だから、「恵子ちゅうちよ」と躊躇なく名前を付けました。そして、三日の山を越えてくれたわけです。本当に小さい子がミルクを少しずつ飲んで成長していくのです。それは家内が一番よく知っています。その後は本当に病氣知らずですくと健やかに育ちました。一緒に鹿沢かざわの集会に行ったり、本当に二番目の子供は、上の子もそうでしたけれども、集会の中で育ってきました。大体、幼稚園ぐらいまでは、集会の中で育ち、無邪気で、段々物心ものごころがついて自我に目覚め出しますと、親が信仰を押し付けるわけにいきませんので、自分で道を選ぶようになりました。親がクリスチャンだから、子供も当然にということではなくて、自分でこうだとい



うことが分かる時がくるだろうと思いますので、そのときを待っています。恵みの中で育っていったということは、^{まぎ}紛れもない事実です。

そんなことで、私共の集会が「京都キリスト召団」と名乗りましたのは、それから、5年後の1972年なのですが、今年で20年になります。それは一つの区切りでありまして、私が導かれてきたのは、もっともつと前からです。この今の場所には、1966年（昭和41年）に引越してまいりました。それから、ここを「祈りの拠点」にして、一年目に恵子を賜ったということでありました。私共の歩みというのはそのように、何か生活と密着していました。

私はここに来てから祈りの場所は若王子山^{にやくおうじ}に見つけまして、そこに行くようになりました。それから後のいろいろな試練につけ、喜びにつけ、いつも若王子山は私の祈りの山でありました。しばらく途絶えていたのですが、また、今年もそういうことを思いまして、行くようになりました。私一人ですが、今朝も行つて来まして、日曜日はできるだけ、朝山に行つて祈ろうと思つています。また皆さんにもご一緒していただくこともあるでしょうが、朝も早いことですし、自然な形で思っています。若王子の山というのは本当に良いですよ。私はふもとまで2500メートル位走つて行きます。それから山道までが10分ぐらいです。そうしたら、本当に誰も来ない。木立^{こだち}に囲まれた所で声を出して讃美歌を歌つて、聖書を朗読して、お祈りをして帰つて来ます。前置きがいろいろ長くなりました。

●パウロとピリピ教会の絆

今日は、「人生の原点」と題しました。ピリピ書は私にとつてもものすごくつかしい心の書になりました。折りに触れてピリピ書を読む。新約聖書はどこも素晴らしいのですが、書簡の中でピリピ書というのは、本当に私の心の故里^{ふるさと}のような、大好きというか、小池先生が

「新約聖書の中から一つ選べと言われたらどうする」

とよくおっしゃいますけれども、私はピリピ書はそういう意味ではこの一つに価値する、そんな気持ちで受けとつています。それはどうしてかといいますと、パウロの心の姿というか、純粋な切々^{せつせつ}たる思いが諸^{もろ}にぶつけられている書簡、手紙だからです。パウロはピリピの兄弟達のことをとても愛していました。パウロが一番始めに生み出した教会といつてもいい。使徒行伝の16章のところにいきさつが出てきます。

パウロがあちちに行つたのは、マケドニア人がパウロに「来て欲しい」と言つて招いている幻を見まして、マケドニアへ渡つて行きました。そして、ある日のこと、どこかに祈り場があるかと思つて川のほとりを歩いて行ったら、ルデヤという女性に出会います。パウロがルデヤを中心にした数人の女性達に話をしておりましたら、ルデヤは本当に心を開かれた。



「パウロ夜、幻影を見たるに、一人のマケドニヤ人あり、立ちて己を招き『マケドニヤに渡りて我らを助けよ』と言う。パウロこの幻影を見れば、我らは神のマケドニヤ人に福音を宣伝えしむる為に我らを召し給うことと思ひ定めて、直ちにマケドニヤに赴かんと為り。」

さてトロアスより船出して真直にはせてサモトラケにいたり、次の日ネアポリスにつき、彼処よりピリピにゆく」（使徒行伝16・9～12）

簡単に書いていますが、当時の旅行は本当に大変な旅なのです。そして、ピリピに行きました。ピリピはマケドニヤの中でも第一の町で植民地でした。

「われら数日の間この町に留まる。安息日に町の門を出でて祈場あらんと思はるる河のほとりに往き、其処に坐して、集れる女たちに語りたれば、テアテラの町の紫布の商人にして神を敬うルデヤと云う女きき居りしが、主その心をひらき謹みてパウロの語る言をきかしめ給う」（使徒行伝16・13～14）

ここにパウロとルデヤの出会いがありました。そして、パウロの言葉がルデヤの心の中に染み込んでいった。そこで、彼女は家族と一緒にバプテスマを受けて

「どうぞ、自分の家に留まつて下さい」

と、引き留めました。それから、祈り場に度々出掛けるようになりました。祈り場に行く途中に占いの霊に憑かれていた女奴隷がおり、その女奴隷を使つて主人は儲けをしていました。ところが女奴隷がパウロにくつついて離れない。そこで、イエス・キリストの名によりて変な霊を追ひ出した。それで女奴隷は救われましたが、主人は霊力が抜けたので、占いをやつてもらえなくなり、いわば自分の財産を傷つけたということで、パウロを捕えて牢屋にぶち込むということをしました。そこでパウロたちは牢屋につながれる身となりました。

「多く打ちてのち獄に入れ、獄守に固く守るべきことを命ず。獄守この命令をうけて二人を奥の獄に入れ、桎にてその足を締め置きたり。夜半ごろパウロとシラスと祈りて神を讃美するを囚人ら聞きいたるに、俄に大なる地震おこりて牢舎の基ふるい動き、その戸たちどころに皆ひらけ、凡ての囚人の縄縄とけたり。獄守、目さめ獄の戸の開けたるを見て、囚人逃げ去れりと思ひ、刀を抜きて自殺せんとしたるに、パウロ大声に呼わりて言う『みずから害うな、我ら皆ここに在り』」（使徒行伝16・23～28）

いまだかつてなかったようなことが起こりました。喜んで獄につながれている人は一人もいない。機会あらば逃げ出そう、脱走しようと思つています。それがこのような地震で戸が開けてしまった。これはもう逃げられたと思つて、獄守は自害しようとしたところが、誰も逃げていない。

「獄守、灯火を求め、駆け入りて戦きつつパウロとシラスとの前に平伏し、



之を連れ出して言う『君等よ、われ救われん為に何をなすべきか』(使徒行伝 16・29～30)

パウロたちだけでなく他にたくさん囚人がいるのですが、誰も逃げ出さなかった。だから、^{ひとやもり}獄守は本当に驚嘆したわけです。感動しました。もちろんパウロは囚人や獄守たちと何の^{かか}人間的な関わりはありません。知り合いでもなんでもない。立場はむしろ敵と味方みたいなものです。ところが、獄守はこの一晩の出来事において、パウロとシラスの前に平伏して、しかも、

「どうしたら救われるのですか、あなたについていらつしやる神様はすごい」と、全く感動したわけです。

「二人は言う『主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救われん』斯て神の言を獄守とその家に居る凡ての人々とに語れり。この夜、即時に獄守かれらを引取りて、その打傷を洗い、遂に己も己に属する者もみな直ちにバプテスマを受け、かつ二人を自宅に伴いて食事をそなえ、全家とともに神を信じて喜べり」(使徒行伝 16・31～34)

これがピリピに教会が出来上がるきっかけになりました。ルデヤと獄守という出来事を背景にして教会ができた。パウロはピリピの教会をとっても身親しい教会として愛していました。ですから、このピリピ書というのは第1章から見えていくと分かりますように、とても個人的な親しい気持ちで書かれた手紙なのです。1章の3節にも、

「われ汝らを憶うごとに、我が神に感謝し、常に汝ら衆のために、願いのつどつと喜びて願いをなす。是なんじら初めの日より今に至るまで福音を弘むることに与るが故なり。我は汝らの衷に善き業を始め給いし者の、キリスト・

イエスの日まで之を全うし給うべきことを確信す」(ピリピ 1・3～6)

パウロとピリピの教会とは距離的に遠いですから、めったに訪ねて行くこともありません。けれども、心の中ではとても深くつながっています。

「我いかにキリスト・イエスの心をもて汝ら衆を恋慕うか、その証をなし給う者は神なり」(ピリピ 1・8)

「恋慕う」という、男女の愛のような思いでパウロはピリピの兄弟姉妹のことを思っているわけです。単にお役目で伝道しましたというのではない。もつともつと深い心の絆、^{きずな}霊の絆があります。そして、ピリピ書を書いているときはパウロは囚われの身だった。ローマでまもなく殉教するという殉教直前の手紙なのです。そういう縄目にある身でありながら、ピリピの兄弟達のことを思つて切々と語りかけているのがこのピリピ書です。このピリピ書はいわば殉教直前ということ、本当にパウロの何か澄み切った心境というか、そういうものが現れている書です。私はこのピリピ書の中のバックボーンというか、土台、原点というか、それをどこに見たかということを今日お話ししたいわけです。



●パウロの改心

ピリピ書は1章、2章、3章、4章とありまして、小池先生はこれを1967年に第1楽章、第2楽章というふうにお話をなさいました。本当に素晴らしい話でした。第1章「わが生くるはキリスト」、第2章「無」、第3章「追求無限」、第4章「一切の秘訣」と題し、その起承転結を、山から谷に下ってまた上がって天に上っていくという図解もされまして、お話しになった書です。私はまた別の角度からピリピ書を読みまして、どこにポイントを見つけたかといいますと、第3章8節です。これは私の個人的な読み方と想っていたので結構です。3章を初めから見していきます。

「終りに言わん、我が兄弟よ、なんじら主に在りて喜べ。なんじらに同じことを書きおくるは、我に煩わしきことなく、汝等には安然なり。なんじら犬に心せよ、惡しき労働人に心せよ、肉の割礼ある者に心せよ」（ピリピ3・1）

2)

「犬」、「惡しき労働人」、「肉の割礼ある者」はみな同じことです。パウロはいわば従来のユダヤ的なことから足を洗ってしまいました。洗わされてしまいました。パウロはユダヤ教のリーダーでありましたが、それは神様に仕える道として最も正しい道である、先祖伝来の命懸けで守るべき宗教的な道である、と信じてきたからです。それに対してキリストは神に対する反逆者、神に逆らう大罪人、我々の先祖伝来の宗教を破壊する者。だから、キリストが十字架に付けられたのは当然である、と見ていました。ところが、使徒行伝9章にあるようにダマスコ途上でキリストが現れました。パウロにとって晴天の霹靂とはこのことです。

ちよつと使徒行伝の大迫害のところを見て下さい。パウロはステパノの殉教のときのいわば先導者みたいな者です。ステパノが迫害され、石打ちにされた記述が7章54節からあります。ステパノがオーソドックスなユダヤ教の大本山の信仰のあり方の誤りをずっと説いてまいりまして、

「あなた方は聖靈に逆らっている」

と言ったわけです。

「あなた方は預言者達を殺してきた。そして、ついに主イエス・キリストをも殺してしまった」

と批判しました。そこで、

「人々これらの言を聞きて心、怒りに満ち切歯しつてステパノに向かう。ステパノは聖靈にて満ち、天に目を注ぎ、神の栄光およびイエスの神の右に立ちたもうを見て言う、『視よ、われ天開けて人の子の、神の右に立ち給うを見る』。ここに彼ら大声に叫びつつ耳を掩い心を一つにして駆け寄り、ステパノを町より逐いいだし、石にて撃てり。証人らその衣をサウロ（パウロ）という若者



の足下に置きけり。斯て彼等がステパノを石にて撃てるとき、ステパノ呼びて言う『主イエスよ、我が霊を受けたまえ』、また跪きて大声に『主よ、この罪を彼らに負わせ給うな』と呼わる。斯く言いて眠に就けり。

殉教の第一号はステパノでありました。

サウロは彼の殺さるるを可しとせり。

青年サウロはこのようにしてステパノを迫害する。いわば直接手を下したようなものですね、そこに居合わせましたから。

その日エルサレムに在る教会に対して大なる迫害おこり、使徒たちの他は皆ユダヤ及びサマリヤの地方に散らさる。敬虔なる人々ステパノを葬り、彼のために大に胸打てり。サウロは教会をあらし、家々に入り、男女を引出して獄に付せり」（使徒行伝7・54、8・3）

パウロは狂い猛っているわけです。これは自分の欲ではない。本当に宗教的熱心です。宗教的熱心が方向を間違えればどんなに恐ろしいか、よくわかります。パウロはこうにしてキリスト教徒を迫害していました。

「サウロは主の弟子たちに対して、なお恐喝と殺害との気を充たし、大祭司にいたりて、ダマスコにある諸会堂への添書を請う」（使徒行伝9・1、2）

自分の肉の思いというか、我欲ではやっていません。宗教的信念ですから、ちゃんと大祭司からお墨付きをもらって、それを錦の御旗として討伐に出かけるわけです。キリストなる訳の分からないものを信じている。これは一掃しなければならないという宗教的信念でやっていきます。

「この道（キリストを信ずる道）の者を見出さば、男女にかかわらず縛りてエルサレムに曳かんためなり。往きてダマスコに近づきたるとき、忽ち天より光いでて、彼を環り照らしたれば、かれ（パウロ）地に倒れて『サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか』という声をきく。彼いう『主（だんな様）よ、なんじは誰ぞ』。答えたもう『われは汝が迫害するイエスなり。起きて町に入れ、さらば汝になすべき事を告げられるべし』」（使徒行伝9・2、6）

これはもう、人ではどうにもならない。パウロに敵う者は誰もいない。だから、今度はキリストが直々にパウロに現れて、

「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか」

と。彼は地に倒れたとあります。

「私はお前が迫害するイエスである」

と。イエスは天界にいらっしやるけれども、弟子達に対する迫害は即ちイエスに対する迫害でありますから、

「汝が迫害するイエスなり」



とおっしゃいました。

「同行の人々、物言うこと能わずして立ちたりしが、声は聞けども誰をも見ざりき。

何かまるで、雷がなるような音がしているのは聞いた。しかし誰も姿が見えない。

サウロ地より起きて目をあけたれど何をも見えざれば、人その手をひきてダマスコに導きゆきしに、三日のあいだ見えず、また飲食せざりき」（使徒行伝9・7～9）

三日間というのは相当に長い。三日の間、目が見えない、飲み食いもしない、半ば死人のような姿でパウロは過ごしました。

「さてダマスコにアナニヤという一人の弟子あり、幻影のうちに主い給う『アナニヤよ』答う『主よ、我ここに在り』主い給う『起きて直という街にゆき、ユダの家にてサウロというタルソ人を尋ねよ。視よ、彼は祈りおるなり。又アナニヤという人の入り来りて再び見ゆることを得しめんために、手を己がうえに按くを見たり』アナニヤ答う『主よ、われ多くの人より此の人に就きて聞きしに、彼がエルサレムにて汝の聖徒に害を加えしこと如何許ぞや。また此処にても凡て汝の御名をよぶ者を縛る権を祭司長らより受けおるなり』主い給う『往け、この人は異邦人・王たち・イスラエルの子孫のまゑに我が名を持ちゆく我が選びの器なり。我かれに我が名のために如何に多くの苦難を受くるかを示さん』（使徒行伝9・10～16）と。

「パウロは私が選んだのだ」

と、キリストは本当に敵の大將みたいな者を引っくり返して、自分の弟子としてお用いになる。それでアナニヤは納得しまして、パウロの処に行きました。

「アナニヤ往きて其の家にいり、彼の上に手をおきて言う『兄弟サウロよ、主、即ち汝が来る途にて現れ給いしイエス、われを遣し給えり。なんじが再び見ることを得、かつ聖霊にて満されん為なり』直ちに彼の目より鱗のごときもの落ちて見ることを得、すなわち起きてバプテスマを受け、かつ食事して力づきたり」（使徒行伝9・17～19）

アナニヤが按手をしましたら、たちまちパウロの目から鱗の如きものが落ちて見ることができた。「目から鱗のようなものが落ちた」とよく言いますが、パウロにとつてはそういう体験だった。肉眼がこうして癒され、そして、霊の眼が開かれ、今度はキリストの御名によるバプテスマを受けました。今まではユダヤ教のバプテスマを受けていましたが。

「サウロは数日の間ダマスコの弟子たちと偕におり、直ちに諸会堂にて、イエスの神の子なることを宣べたり」（使徒行伝9・19～20）



引つ捕えようと思つていた相手が味方になり、主の兄弟たちになつてしまい、その弟子たちと一緒に過ごしました。そして、今度はユダヤ教の会堂に行きまして、

「イエスは神の子なり」

と、まるで逆のことを言いだしました。

「聞く者みな驚きて言う『こはエルサレムにて此の名（キリストの名）をよぶ者を害いし人ならずや、又ここに来りしも之を縛りて祭司長らの許に曳きゆかんが為ならずや』サウロますます能力くわわり、イエスのキリストなることを論証して、ダマスコに住むユダヤ人を言い伏せたり。

日を経ること久しくして後、ユダヤ人かれを殺さんと相謀りたれど、その計略サウロに知らる」（使徒行伝9・21～24）

今度はユダヤ人たちは、パウロは裏切り者だ生かしておけないと、殺害する相談をするわけです。それが漏れてパウロに伝わった。

「斯て彼らはサウロを殺さんとして昼も夜も町の門を守りしに、その弟子ら夜中、かれを籃にて石垣より吊り下せり」（使徒行伝9・24～25）

脱出作戦が成功し、パウロは逃れてエルサレムへ行くことになるわけです。そのような記事がずつと出て来ます。

●キリストによりて誇る

そんなパウロがピリピ書3章で、「犬」、「悪しき労働者」、「肉の割礼ある者」と言うのは、かつての自分の姿なのです。パウロは徹底的に古いものを捨て去つてキリストオンリーと言いました。だから、ユダヤ教徒のパウロに対する憎しみ、迫害は強かつたのです。総てを温存しながら、少しずつ少しずつがまんするのだったら良かったのですが。パウロはそんなことはとても我慢がでしなかつた。奇麗さっぱり、自分が古い自分から生まれ変わったように、自分の過去の宗教体験もかなぐり捨てて、ただイエス・キリストのみ、そして割礼（アブラハム以来、神の約束として、永遠の定めとして、神が語りかけられたもの）すらいらなうと言つたわけですから、今度はパウロが迫害されるのは、当たり前のことなのです。キリストも、

「神様の御意だ」

と言つて、安息日に人を癒したり、従来のユダヤ教の枠をぶち破つたようなことをなさいました。ユダヤ教には一つの役割があつた。しかし、その役割は終わつてゐる。そして、

「ユダヤ教が証していたもの、ユダヤ教が指し示していたもの、その本体がいま現れた。それが私だ」

と、キリストは言われました。ところが、その時代の人にはそれが見えないから、ただキリストは破壊者と写つた。パウロもそのように見た。ところがパウロはキリストによつて



霊の目が開かれた。

「主イエス・キリストは一切の縄目から我々を解き放って新しい生命に引き出して下さった。贖^{あがな}って下さった。二度と奴隷のくびきに繋が^{つな}れてはならない」

と。宗教は人を正しい生命の道に導こうとしながら、逆に手枷足枷^{てかせあしかせ}となつてがんじがらめに生命を縛^{しば}ってしまう。そのことをパウロ自身が非常に気づいていました。ステパノのうにとってもあのような輝いた姿にはなれない。ステパノは輝いていた。そして、石打ちに遭いながら、

「彼らを赦してやって下さい」

と、主様の十字架上での祈りと同じ祈りをした。そんなことはとても自分にはできない。もう、自分の救いのことで精いっぱい、少しでも律法に反することをしている人がいたら徹底的に糾弾^{きゅうたん}しました。そのように人を責め、審き、そして自分を何とか律法の道に適^{かな}う者として鍛練^{たんれん}する。そのことで精いっぴいですから、愛だとか、赦^{ゆる}したとか、そんなことは私の字引にはない、そういう姿でありました。それで、新しく生まれ変わってみると、自分を迫害してくる者達、自分たちの宗派を広めている人達、その人達は本当にキリストに如何に逆らっているかということがはつきり分かってきました。だから、

「犬に心せよ、悪^あしき労働^{はたらき}人に心せよ、肉^くの割礼^{かつれい}ある者に心せよ」

と言ったのです。今だつて本当にそうです。キリスト教の名においていろいろ報道もされています。あんなのは本当にひどいことです。あれほどでないにしても、いろいろキリスト教という名を使いながら、ここでパウロが言っているようなことがまとい付いていると思う。私達は何も持ちません。私達は、何かというとピリピ書3章3節、これなのです。私達の願いは、他の方々も大教会も大組織も大教団もみなこの心になつて下さったら、それで良いのです。何も破壊することを言っているわけではありません。

「外側ではない、本当に内側だよ、内側にこれがあるか」

ということのパウロは言っています。

「神^{みたま}の御霊^{みたま}によりて礼拝^{れいはい}をなし、キリスト・イエスによりて誇り、肉^{たの}を恃^{たの}まぬ

我らは真^{まこと}の割礼^{かつれい}ある者なり」（ピリピ3・3）

と。我々の姿は、

「神^{みたま}の御霊^{みたま}によりて礼拝^{れいはい}をなし、キリスト・イエス（だけ）を誇りとする」

キリスト様だけを讃^{たた}える者である、他は一切何もなし、キリストだけです。

「うちの教会は何十年の歴史があります、どんな立派な人物が出ています」

と、そんなことは問題ではない。キリストだけを誇りとする。肉を頼まない。ここである「肉」とは何かと言いますと、うわべのものというか、血筋、伝統とか、宗教的意味で言っています。しかし、単に宗教的なことのみならず、もっと広く社会的、人間的、いろいろな面で拡張して理解することができると思う。「肉」という言葉は非常に意味が広いですから、



いわば、人間から発して来るものというふうにも取れるし、生まれながらのものというふうにも取れるし、何か自然発生的なもの、人間の我欲を源みなもとにしているものは全部「肉」になります。いわゆる肉欲という意味ではありません。人間のいろいろな情欲等は、それ自体は本当は中立なのです。しかし、それが自己中心的な自己本能というものに裏づけられるがゆえに、どうしても他者を傷つけるような姿になって現れて来ます。だから、「悪しきもの」という評価を受けてしまうことになるわけです。ここでの「肉」というのは非常に広い意味です。どんなものかということは、次に出て来ます。パウロは全部そんなものは問題にしていない。

「私は肉を頼まない、神の御霊によって礼拝をしている」

と。肉と霊は対立すると思ってください。だから、割礼かつれいというと、本当の心の割礼は霊の割礼で、うわべの割礼ではない。うわべの割礼というのは、ユダヤ教で男の赤ちゃんが生まれて八日目に子供を神様に捧げます。そのときに男子の大切な所にメスを入れます。ひとつの碎けの徴しるしです。神様の前に碎かれているという姿を現しています。ところが、エレミヤも言っています。

「お前達は肉体に割礼をもっていないが、心はまるで石のごとく固いではないか、心にこそ割礼を施せ。碎けたる心、神様の前にぶつぶつぶれた姿、それで主の御名を呼ばないと、身体に幾ら割礼の徴をやっているもそんなものは何の値打もない」（エレミヤ9・25）

と。その通りです。だから、パウロの姿は神の御霊、キリストの御霊によって神を拝している。主イエス・キリストを一切としている。肉を問題としていない。そういう姿こそが神の喜び給う割礼の真の意味であります。4節、

「もし、他の人、肉に恃たのむことありと思わば、我は更に恃たのむ所あり。我は八日めに割礼を受けたる者にして、イスラエルの血統ちすじ、ベニヤミンの族やから、ヘブル人より出でたるヘブル人なり。律法おきてに就きてはパリサイ人びと、熱心につきでは教会を迫害したるもの、律法によれる義に就きては責せむべき所なかりし者なり」（ピリピ3・4～6）

もし、あなた方が肉、肉と言うならば、私だつて肉の誇りはあるのだよと。

「我は肉に恃たのむ所あるなり」

と。言わしてもらおうではないか。私はちゃんと八日目に割礼を受けているよと。ということは「八日目に割礼を受けよ」とモーゼに言われていても、多分総てに浸透すべしていなくて、あわてて何日も立ってからやっているということもあったのでしょうか。きちつと八日目に儀式に乗っ取ってやるということは、そう行き渡ってなかったかも知れません。それから、イスラエルの血統である。民族ではベニヤミン、つまりヨセフの弟です。ヤコブの好きだったラケルの二人の子供がヨセフとベニヤミンでしたね。ベニヤミンを生んでラケルは死



にました。ヨセフはエジプトでベニヤミンに会いたく会いたくて仕方がない。ベニヤミンの首を抱いて泣いたとありましたね。そういうベニヤミンの直系、ヘブル人中のヘブル人だと。だから、血脈からいったら、本当にエリートなのだと。それから、律法おきてということについてはパリサイ派、最も厳格に神の律法を守るといふ派である。熱心さということでは教会を迫害してパウロの名を聞けばみんな震え上がる、そのくらいにすごかった。徹底していたのです。総て徹底していた。

「律法によれる義につきでは責むべきところなかりし者なり」

と。こんなに言い切れることは大変なことですよ。今で言うならば、仏教では千日行せんにちぎようとか、いろいろな行がありますね。けなす人はけなしたら良いですけども、ああいう行を立派にやり遂げるというのは、本当に大変だと思う。弱い肉体に鞭打むちって、何年もの修行とかいうのは、そんなにたやすいものではありません。しかし、それを本当にやり通す、つまり自分をそれだけコントロールする。それについてパウロは本当に誇ろうと思ったら、誰にも負けない。

●信仰生活の原点

だから、あらゆる面で実力者パウロなのです。ユダヤ教の次の世代の代表者、これはパウロである。知的な面、血統、道徳的な面、宗教的な面、どれをとっても、パウロは本当にエリート中のエリートです。だからダマスコへ、迫害の急先鋒になって遣わされたわけですから。志願兵です。そういう身の回りにいっぱい勲章くんしょうがついている身であります。しかし、それが、キリストに出会って、引っくり返されてから、全く光が失ってしまった。こんなものはマイナスの極みきわだとさえ思うようになった。

「さきに我が益たりし事はキリストのために損と思うに至れり。然り、我はわが主キリスト・イエスを知ることの優すぐれたるために、凡すべての物を損なりと思ひ、彼のために既に凡ての物を損せしが、之を塵芥あくとのごとく思う」（ピリピ3・7）

私はこの8節の言葉に本当に打たれます。

「我はわが主キリスト・イエスを知ることの優すぐれたるために、凡すべての物を損なすべりと思ひ、彼のために既に凡ての物を損せしが、之を塵芥あくとのごとく思う」

これが実は、信仰生活の原点であると思います。

我々は信仰生活と言いましても、社会生活を営みます。何も、天国で暮らすわけではありません。クリスチャンばかりで特別の社会を作って、どこかに隔離された処で讃美と祈りだけで暮らすわけではありません。正にこの娑婆しゃばに暮らすのです。本当に会社だって、どこだって、競争の激しい、そして、血筋が尊ばれ、名誉だとか、地位だとか、そのようなものが尊ばれる。本当にそういう実力社会、誰もが自分のチャームポイントを持ってい



ないといけない、売り出さないといけない、人から信頼されないといけない、そういうことでみんな必死なのです。パウロはパウロで今までいろいろな自分の勲章、武器があったわけです。私はこれですと、人の前に誇って自分を売り込む、そういういわば自分の支えがあった。パウロが胸を張っておられるのは、自分の自負心、自尊心を裏づけているものがあつたわけです。虚勢^{きよせい}を張っているのではない。実力者パウロ。ところが、この8節は、そんなものを全部もう今はマイナスと思っている。いや、思っているだけではなくて、パウロは本当に総てを失い、裸にさせられた。完全にパウロはキリストを除^のけたら、何もない。もう一切を失った。かつて、はぶりを効^きかして、世界をまたにかけて商売をやっていた大富豪が今やセントヘレナに流されてたつた一人ぼっちである、そういう姿を思い出してもらつてもいい。破産宣告を受けて何も無くなつて、家族もどこかに行つてしまった。かつての部下は全部去つてしまつて事務所も会社も何も無い。本当にたつた一人、ぽつんと座っている人間。そんな極端な経験はなかなかないでしょうけれども。

パウロを本当に受けとろう、キリストを本当に受けとろう、福音を本当に受けとろうと思つたら、ここに自分を置かないと、受けとれないです。徹底が必要です。

パウロはユダヤ教において徹底しました。今度はキリストに來たときに、他のペテロやお弟子さん達のような円満な姿ではなく、本当に誰よりもパウロは徹底しました。させられたのです。

「我はわが主キリスト・イエスを知ることの優れたるために、凡ての物を損な

りと思ひ、彼のために既に凡ての物を損せしが、これを塵芥のごとく思う」

と、瘦^やせ我慢では言っていない。本当にこれなのだ、これが私なのだ。

福音が、キリストのありがたさが、どんなときにわかるかということをおはいつも言うのです。人生の日の当たる道を歩いているときは、あまり感じられない。たしかに心^{おだ}が穏やかであるかも知れない。憂いは少ないかも知れない。

「われ主の中に、主わが中に」

と告白できるかも知れない。しかし、いつしか、それが薄れてくる。本当に日だまりの中にいながら、「われ主の中に、主わが中に」との告白、そして、このパウロのような告白ができる人は本当に素晴らしいと思います。けれども、なかなか人間は、そうはいきません。だからと言つていいのでしょうか、主は時々我々をどん底に突き落とす給うのです。愛をもつて、そして孤独の淵^{ふち}に突き落とされることがあります。何もかも、外なるものを全部奪うほどでなくても、それが全く光が失われてしまうような思いに、我々を突き落とされるときがあります。そんなときに、ピリピ書を読んでご覧なさい。ここに來てご覧なさい。

「そうだ、これが私の生きるべき道なのだ。私はいつしか、この世のいろいろなことに責任も負わされる、人からも頼られる。いつしかキリストと口で言いながら何かそこがぼけているような、昔みたいに熱心に祈らない。なんとなく、靈的に



眠っているような、そういう姿であった」

ということに気づかれます。ありがたいことに、本当にキリストは我々人間に渇きというものを与えて下さいます。正直なものですよ。集会から離れ、あるいは集会が休みになり、しばらく休んでいて、その間1か月でもいいです。あるいは2か月でもよい。その間、自分がどんな霊的生活を送っているか、本当に祈り深い生活をずっとやっていれば2か月離れても、3か月離れてもどうもありません。けれども、集会に来ないことは、即ち祈りの休みである。離れていてもかっこうだけの祈りはやる。

「主様、ありがとうございます」

と、かっこうだけは祈るのですけれども、真心がなくなり、体当たりの祈りでなくなっている。形だけになってくる。1日1章は聖書を読みましよう、聖書はどこか読む。今日はこれで終わりましたと、そういうふうになってきて、10日、20日と経ってきてご覧下さい。イエス・キリストは素晴らしい人ですね、と口では言いますけれど、実感がこもっていない。誰かが言っておりました、かつての私は思っておりました、というように段々距離が出てきます。そうしたら、何か自分の心の中が空しくなつて、光が段々失せてくる、感激がなくなつてきます。これは黄色信号と思つて下さい。

「お前の靈魂たましひがそんなものでは承知しない。お前の靈魂はそんな安やすつぽくできていない。お前は一体何を抛り所として生きているのか。お前の抛り所は何なのか。お前の人生で本当に大事なものは何なのか」

と、それを問われているのです。そりゃ、社会的には成功するかも知れません。いろいろな物が備えられているかも知れません。皆は幸せな人と言ってくれるかも知れません。けれども、心の中は段々空虚になつてきます。渇きが出てきます。

渇きというのは本当に主が、神が我々に与えて下さった恩恵めぐみですね。渇きがあるということは、渇きを満たす水があるということです。真清水ましみずがあるということです。

渇けるときに、飴玉あめだまをしゃぶつても、ちつとも癒いえません。渇きを癒いしてくれる本当の真清水。このごろの日本の水は渇きを癒いしてくれない。本当に染しみ入るような山の真清水、そういう真清水を我々は求めるのです。

それは何かというと、このピリピ書のここなのです。

「然しかり、我はわが主キリスト・イエスを知ることの優すぐれたるために、凡すべての物を損しなうと思う」

と。

「これほどに、あなたは主イエス・キリストを知っていますか」

と問われています。

ただの禁欲主義ではないのです。

「キリストの中にすべてを捨てたら、あなたは涅槃ねはんの境地に入るよ。だから、捨て



なさい」

と。キリスト・イエスは本当にすごい。それに気づいたら外の物は全部色あせてしまった。今まで、夜のネオンが輝いていた。お燈明も灯っていた。しかし、朝日が出て来たら、太陽の輝きに比べたら、もう他の物はみんな色あせてしまった。自分は何を見ていたのだろうという思いですね。そのぐらいに、イエス・キリストは素晴らしい。ただ「主イエス・キリストを信ぜよ」ではないのです。

こんなにすごい主イエス・キリスト様に直々に出会って下さい。主様はあなたを捕まえるようとしていらつしやるのです。

「汝は我がものなり、我、汝を離さじ」

と言っている主の愛の御声（みこえ）が聞こえないか、もうそんなに鈍（にぶ）くなってしまったのか、ということなのです。

主様というすごい宝、これを見いだし、これに捕まえられたら、他の物は塵芥（ちりあくた）も同然だ、問題ではない。そのところを、どうぞ、正しく受けとっていただきたい。

「そうなのですか。主様に出会ったら、恋人も家庭も学問もその他のことも、私が今まで益（えき）と思っていたことも、全部塵芥にして捨てないといけないのですか」

と。マタイ伝19章16節の「富める青年」を見てください。

「あなたが本当に永遠（とこしえ）の生命（いのち）に入りたければ、持てるものを全部売り払って、貧しい人に施して、そして私について来なさい。そうしたら、天国に生きる、

永遠の生命だよ」

とキリストは言われた。けれども、彼は捨てられないので、

「悲しみをもよおして、去って行った」

とありました。

「ひどい話だなあ。何ぼなんでもちよつと、主様、やり過ぎと違いますか」

と、思っただけで読んでいました。もし、あのとき、青年が

「分かりました、惜（お）しくて惜（お）しくてたまりませんけれども、清水（きよみづ）から飛びおりるつ

もりでみんな捨てます」

と、パツと捨てたとしますね。それでも、彼は救われたいです。

「惜（お）しくて惜（お）しくてたまらない、そのことを思うと悔（くや）しくて夜も眠れない」

なんて。そうではないのです。

本当に主イエス・キリストの優れた（すぐ）たるがゆえに、主イエス・キリストという素晴らしい宝（たから）に虜（とりこ）にされてしまったがゆえに、その他の物は自然に力を失ってしまったということ。

世の中のさまざまな事は、それ自体の素晴らしさはいろいろあっても、だからどうこうということはない。全く自分とはとられの無い自由の身になるのです。

パウロのこの後を見て下さい。実に豊かです。一切を持っている。けれども、一切を持つ



ていることと、それに囚^{とら}われていないということは全然別なのです。

多くの人はいろいろな物を与えられますと、それに囚^{とら}われてしまう。いつしか自分が自分の支えになって、それで私は生きていると思ってしまう。イエス様にして欲しいときは「イエス様、イエス様」と言っていました。けれども、今、こんなふうにいるんなものが備わりますと、

「もう、イエス様、あなたの御用は終わりました、長い間お世話になりました」

と。これではダメですよ。神様を離れようと思うときは、ついつい自分が惨^{みじ}めで、こんな自分はとてもこれ以上イエス様のご厄^{やつかい}介になる訳にはいかない、という義理立てもありましょう。いろんなことでもう自分はふさわしくないと思っただけで離れる気持ちが始まるのでしようけれども、主観的な気持ちはどうあろうとも、そんなことは問題ではありません。キリストは離し給わないのです。

信仰生活というものは、自分の単なる主観的な思いで「私は信じます」と思ったら信仰があるとか、「私はもう捨てます」と思ったら信仰が無くなるとか、そんな安っぽいものではない。切れない絆^{きずな}で結ばれてしまっているという、事実なのです。

自分がどちらを向こうがそんなことは問題じゃない。ただキリストに顔を背^{そむ}けてあつちを向いていたら、段々心が空^{むな}しくなってくる。そのとき、

「私がお前を捕まえていることに気づくのだ。向こうを向いているのをこっちに向くのだ。立ち返りなさい。帰ってきなさい。私はお前を離さないから」

と。こちらの心の姿がいろいろ変わるのに応じて主様もいろいろ変わられる、それだったらどうしようありません。主様は変わられません。こちらはどんなに変化しても、主様は変わられません。いつでも火花する思いで待っているらしいや。こちらが帰れば、いつでも火花してくれます。願わくば、あちらを向いている時間が短い方が良い。願わくば、あちらを向かない方が良い。いつも主様を見ているほうが良いです。

●本来、無一物

だから、皆さんが病気に倒れたりとか、思わぬ事故に見舞われてベッドにくくりつけられたり、その他いろいろなことで、自分の志^{こころざし}が挫折^{ざせつ}する。あるいはうまくいかない。本当に失ってしまう。そんなときに、ここに帰って来て欲しいのです。

「お前に何かがあるのかね、お前は何を抛^なり所^{ところ}にしているのか。お前はもととも何も無いのだよ。無一物なのだよ。私がお前の宝なのだよ。私という絶大なる宝、富み、それで十分じゃないのかね。お前はあれもこれも欲しいのかね。それとも、ただ一つ『主様あなただけ!』と、それに徹^{てつ}することができかね」

と。奪^{うば}われてしまったときはもう問われるまでも無いでしょう。主様しかないのです。いろいろな物がありますと、「どうだね」と聞かれている訳ですね。



「ううん、ちょっと考えさせて下さい。確かに主様、あなたは素晴らしい。しかし、あれもこれもみんな魅力があるのです。塵芥ちりあくたつてそんなのひどいではありませんか。やっぱり、魅力があるのです」

と。自分の心の中で、本当に私にとつては、主様あなたが一切なのです。主様という宝主様と私、この直結きずなの絆。ちようどお母さんのおなかの中にいたように主イエス・キリストのおなかの中に居て、そして、産んでいただいた。そして臍へその緒おでつながっていました。今も祈りのパイプで、御霊みたまでつながっています。御霊という生命いのちが私の中に来ています。主様は私の中に生きておられます。この絆、主は私の牧者です。私に乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させ、憩いこいのみぎわに伴い給います。

「たとえ、われ死のかげの谷間を歩むとも、災いを恐れじ。なんじ我とともに在いませばなり」（詩篇23篇）

あの牧者の歌、本当にその通りなのです。

その他のことは全部賜たまわりたるものです。学問、家族、恋人も、その他の能力、いろいろな美しさも、凡すべて賜りたるものです。自分のものではありません。それは賜りたるもので、主様が下さった恩恵めぐみなのです。主様が下さったゆえに、いつ、主様がお戻しになっても、何も我々は言うことができないのです。

「主、与え給えば、また、主これを取り給うべし。主なる神は讃むべきかな」（ヨ

ブ1・21）

これなのです。主が与えて下さったいろんな良きものです。だから、いつでもそれは主にお返しすべきもののなのです。

仕事だつてそうです。自分の本来の力に余るいろいろな仕事を与えられます。それも自分が選び取った仕事というよりも、主が与えられた仕事であり、主の御力でなさせていただきます。できても、できなくても、それはもう自分の責任ではない。主様に一切預けて主様に委ゆだねていきます。

そうでないと、やり切れないです。正直、私の十の力のところへ百ぐらい仕事がくる。本当のところ、満足させられるはずがないのです。とうに破産宣告をされても良いぐらいです。これを法律では債務超過さいむというのですが、こっちの方に力をいれれば他のほうは不満足になります。どれもこれも満遍まんべんなくするとすれば、どれもこれも不完全になります。どうしてもか分からない。集会も含めまして、それです。あらゆることにおいて、不完全です。でもどうしようもない。どうするのですか、主様に任せておきます。

なるようにしかありません。これが私の流儀です。

「明日あすのことを思い煩わづらうな」

と。ありがたいございます。だから、奥田に頼むのはやめたと思えば、向こうがこれからはおつしやらないでしょうし、こんな状態でもなお頼んでこられるかも知れない。



「もう、私は自分で責任が取れません。もう、無責任です、申し訳ありません。あなたが早く原稿を出さないで、いろいろな人が迷惑をする。しかし、それをどうなさろうとも、ご自由にそちらでやって下さい。私はもう今、精いっぱいのことを一生懸命やります。それしか言えません。それを切るなりどうするなり、それはそちらでお決め下さい」

と。病院でお働きになつてゐるかたも、非常に大変らしいですね。いろいろお聞きします。自分で百%完璧かんぺきにと思うと、とてもできない。自分ではない、主様がここに遣つかわして、私を働かして下さつてゐる。ある患者さんにはずいぶん行き届き、ある患者さんには行き届かない。人間的には不公平かも知れない。しかし、自分としては精いっぱいやって、結果としてそうなつても、これは自分の所為せいではないと。もう何もかも、主様に責任を取つていただく。もともと、もう私は「一切のものを損せし身、もう凡すべてを失なつたもの」、凡て失なつてゐる。私のものではないのです。

学者だつてそうですよ。論文を書かねばならない。それも単に自分個人の事だけなら良いけれども、みんなとチームを組んでやつてゐるときに自分がなかなか書けなかったり、遅れたりすると、本当に気が重いの、やりたくても他の様々な家事があつたり、病気に倒れたりとか、本当に無念やるかたない、残念無念という思いもありましょう。でも、

「私はもともと何もないのだ、もともと無一物むいちぶつなのだ」

と。私が、

「主様、助けて下さい。主様、あなたに生命いのちをいただきたいです」

と、主様のところへ来たとき、既にこの世に対して死んだのです。

古き私は十字架で身の回り全部一緒に捧げました。この身このまま、付属物も一切、主様の十字架に引き取つていただきました。一遍いつぱんあそこで死にました。そうしたときに、主は私の罪を許し、過去を許し、

「新しい生命に生きろ」

と言つて、新しい誕生を下さいました。

新しい誕生を下さつた。様々なものを付属品としてお与へ下さつた。一遍、葬ほうむつた過去が新しい装いよせおでまた私のところへ帰つて来た。けれども、それは連続してゐるようでありながら、非連続なのです。一度神様に捧げたが、また神様から賜たまわつたのです。私のものではない。家族だつてそうだ。家族は自分のものだと思つていたら、だめです。これは賜たまわりたるもの、一時お預かりしてゐるものです。子供だつてそうです。みんなお預かりしてゐるものです。一日一日自分として精いっぱいのことをしましょう。

そのようにして、積極面では主イエス・キリストは絶大なる富とみであります。輝きであります。それから、消極面では自分自身を含めて、いろいろ自分に賜つてゐるものは、全部これはもう自分のものではない。これは賜りたるもの、お借りしてゐるもの、預かりものです。だから、



自分はそれに囚われない。たとえば、それを全部奪われても、それはよろしゅうございますと。パウロは実際失ったのです。イエスのために凡てすべのものを失った。けれども、今は何も思っていない。ここで、パウロが言っていますのは、さっきの肉の誇りといったものでありますけれども。

●エン・クリスト

そして、彼自身のユダヤ教の中での地位、誇り、いろいろなもの、それを全部失った。それどころか、迫害され、生命を狙われる者となった。しかし、もう問題ではない。何故かという、9節へいきます。

「これキリストを獲、かつ律法による己が義ならで、唯キリストを信ずる信仰による義、すなわち信仰に基きて神より賜る義を保ち、キリストに在るを認められ、キリストとその復活の力とを知り、又その死に倣いて彼の苦難にあずかり、如何もして死人の中より甦ることを得んが為なり」（ピリピ3：9）¹⁰⁾

ここで、積極面はいつもキリストです。キリストを得る。それから、「律法による己が義ならで」と言っています。この律法は、ここでは宗教的な自分が育てられてきたあの律法、宗教的伝統、戒め、もろもろの定めなどです。そういったものを立派に満たしていくということによって、

「お前はよくやった、正にお前は神の国にふさわしい」

と、そういう烙印を押してもらう。烙印といったら変ですけれども、ご褒美を頂くという義。しかし、そうではないと。もつと広く言いますと、自分のいろいろな努力だとか、自分の一生懸命の思い、「私がやった」という自分の功績になるもの、そんなものではない。

「この世のものは全部捨てた。ただキリストを頂かんがために。そして私はキリストを頂いています」

「うん、それで義いのだよ」

と、神様はおっしゃる。「こんなふうに立派にやってきました」ということではありません。私はもう本当にこのようにキリストを頂いてきました。「うん、それでいい」と。

「キリストを一切としていることのゆえに神様が喜んでくださる」

という義なのです。他のことは何もおっしゃいません。極端かも知れませんが。

「何もなくて、私はただキリストを頂いてきました。それだけです」

と。でも、パウロはそれを言っていない。パウロは、

「キリストにあつて、誰よりも大使徒ペテロ、あるいはヤコブ、またキリストの直弟子たちの何倍も自分はよく働いた」

と言っています。しかし、そんなものは何とも思っていない。



「私はキリストを頂いているという、そのことだけが私の拠り所だ」と言っています。そのところを間違えないで欲しい。実はキリストを本当に頂いている人は、誰よりも働く。けれども、働いたという自覚さえ持たないのです。

「そんなものは、私の業^{わざ}ではない。それはキリストがなさしめ給うた。止むに止まれずなさしめ給うた。私はこれだけのことをやってきたと自分の業績として人の前に誇るようなものではない。神の前に誇るようなものではない。私が神様に申し上げることがあるとしたら、このように主様を頂いて、主様の中に生きました。主様は私を捕まえて、私を生かして下さったということですよ。」

「キリスト我が中^{うち}に、我^{われ}キリストの中に」

という、その貫き、それだけが神様の前に義とされる唯一のものであると。これが「ただキリストを信じる信仰による義」ということですね。

「キリストを信じる」というのは、「主様の中に生きている」という事実なのです。主様が私の中に生きていらつしやるという事実で貫く。それを神様は喜んで下さる。それだけなのです。

だから、それに貫かれていきますと、本当にリアリティとなつてきますと、本当に生活そのものとなつてきますと、単なる思われたことではなくて、キリストの復活の力を知るといふことになつてくるわけです。キリストの絶大なる生命力が私の中に燃える。そうすると、本当に生身^{なまみ}のまま復活する。そこまで行くかも知れない、行きたいものだ、こういう気持ちなのです。これは観念信仰では出てきません。ただ、お題目で、キリスト教の教義を唱えているだけでは出てきません。

本当にその人の生活そのものがキリストと一つになつていることが大切なのです。だから、生きている間は生命力に満たされている。

病める人に手をおけば、その人は本当に癒^{いや}されてしまうかも知れない。キリストが伝わっていつて、病魔は退散し、悪しき霊は追い出され、キリストが働き給う。だから、自分の肉体に限界がきたときは、霊体^{へんばう}へ変貌^{へんぼう}していく。復活の姿は、キリストの変貌ですから、そこまでいくかも知れない、いや、いきたい。しばらく眠っていて、ラッパの声と共に起き上がってくるという、そんなのではない。本当に変貌していくのです。そのくらの姿に私はなるのだと。それで、自分も本当に十字架の主と一つだから、苦しみだつて、

「キリストの苦しみの足らざるを補う」

とパウロは言いました。本当にパウロはいろいろな苦しみに出会いました。けれども、それ私も主様と運命共同体なのだ、栄光も一緒に頂くならば苦しみも一緒に頂きましょう。そして、



「いかにもして死人の中より甦よみがえり」

と、そこまでいきたいのだと。それで、

「もう今、既にそうなたかについては、私はそこまでは言えない」

と言っています。「我、既に取れり」とか、「既に全うせられたり」とか、それは言えないと。

「しかし、そうありたい、絶対そうしてもらえ」

と、そう思つて、パウロはひたむきに歩んでいます。

「キリストは之を得させんとて我を捉とらえたまへり。

キリストが私を捕まえて下さったのは、こういうところへ向かつて、私を進ませて下さるためであると。

兄弟よ、われは既に捉とらえたりと思わず、唯この一事を務む、即ち後のものを忘れ、前のものに向いて励み、標準めあてを指して進み、神のキリスト・イエスに由りて

キリスト・イエスというお方を媒介として、イエスを通して

上に召したもう召めしにかかわる褒美を得んとて之を追求む」（ピリピ3：12～14）

赤ちゃんは産道を通つて世に生まれて来る。我々はキリスト・イエスという産道を通つて天国に生まれる。その道を外はずして生まれるわけにはいかない。

「我は道なり、真理なり、生命いのちなり。我に由らでは誰にても父の御許みもとにいたる

者なし」（ヨハネ14：6）

と言われた、そのキリスト・イエスという方を通つて、我々は天国へ迎えられています。

「キリスト・イエスに由りて上に召したもう褒美を得んとて之を追求む」

パウロははつきりと目標を天国においていますね。もういつ殉教するか分からない。だから、はつきりと目は天国に向かつているのですが、その僅わずかの日々の地上を走り抜く姿が実に良く現れています。だから、

「靈的に成長しているあなた方も私と同じ思いになつて欲しい。でも、私は違ふという人がいるならば、それだつていいよ」

と。この辺りがパウロの素晴らしいところですね。

「汝等もし何事にも異なる思いを懷いだき居らば、神これをも示し給わん。ただ

我等はその至れる処に随したがいて歩むべし」（ピリピ3：15～16）

「それぞれ自分の達した処に従つて歩んでいつて、人を排斥はいせきしたり、攻撃したりするのには止めよう」

と、パウロは告白せざるを得ない。

「ただ、願わくは私と同じ思いでついて来て欲しいね」ということです。

「汝ら諸共もろともに我に倣ならうものとなれ、且なんじらの模範となる我らに随したがいて歩



むもの

パウロと一緒に歩んでいる多くの先輩たち、そういう人たちをもまた、見て下さいと。

を視みよ。そは我しばしば汝らに告げ、今また涙を流して告ぐる如く、キリ

ストの十字架に敵して歩む者おおければなり」（ピリピ3：17、18）

信者であろうとなかろうと、異邦人であろうとユダヤ人であろうと、キリストに敵して、キリストの十字架に敵して、十字架を蔑ろにして、己が道を行く者が多いと悲しんでいます。

「彼らの終は滅亡なり」（ピリピ3：19）

そのことを思うとパウロは本当に涙します。十字架をおろそかにしていますと、いつしか自我に囚われる、自己充足になる。宗教的な装いを取りましようとも、非宗教的装いでありましようとも、すべて自己中心、我欲を満たすことを求め、人の誉れを求めます。それが滅びにつながります。

「おのが腹を神となし、己が恥を光榮となし、ただ地の事のみを念う」（ピリピ3：19）

この世に立派な人がたくさんいらつしやるのですが、ただ一つを欠く。十字架に敵して歩む。本当に残念なのですけれども、あんなに良い人が、あんなに恵まれた人が、あんなに才能のある人が、どうして

「キリストは私のすべてです」

というところに来て下さらないのだろうか。キリストに在ってなされれば、もつともつと光り輝き、世のため、人のためになるのにと、思うことがいくらでもあります。けれどもまた、そちらの側からすれば私たちの歩き方は、

「変わった人やなあ、なんぞ苦しいことがあつてキリストのところへ行かはったのやなあ。私らから見えてたら、あの人は幸福そのものやのに、なんでキリストに行かんなんのやろう。きつと他人には言えん苦しみがあつたんやろう。気の毒な人や」

と、自分とは全く関係がないみたいに言っています（笑）。

「しかし、害にはならんから、あの人は押しつけたりしないからええわ」

といったところです。宗教は押しつけるものではありません。やつぱり、「あの人の姿を見てついて行こう」と思うかどうか、それしかないと思うのです。

「いつか、気がついてくれる。いつか、主がお示し下さる。だから、私の姿だけはしっかり見ていて下さいね」

と、言いたいわけですね。

私が何を目指して、何を抛り所にして歩いているか、私の源はこのピリピ書、そして新約聖書のキリストなのです。

奥田流とか、奥田派とか、そんなものは何もありません。奥田召団でもない。



「どの召団ですか？」

「はい、キリスト召団です」

と。キリストに属する、キリストの召団なのです。キリストが一切なのです。エン・クリスト（キリストの中に）『エン・クリスト』創刊号1980年夏季号参照」なのです。たまたま、京都だとか、信州だとか、何だとか、地名と一緒にありますが、それは、そういう所に居を構えて、キリストを称えている群れです。

「どこにつながっていますか？」

「はい、キリスト召団です。キリストが召し給うた群れです」

「教派とか、教義とか、あるのですか？」

「はい、新約聖書です。その新約聖書、旧約聖書の捕え方はいろいろな捕え方がありますから。我々は十字架というものを根底にして、聖霊という生命に生きる。十字架という土台に導かれて、この使徒達と思いを同じうして、キリストへキリストへと歩んでいる。そういう旅人の姿です」

と。我々の外側は何も見ざるべきものではありません。しかし、内側はさつき書いてあったように、真の割礼、神の御霊によって礼拝する姿です。神の御霊によってする礼拝は、私をよく祈りに行きます若王子山でもできる。皆さんのお台所でもできる。どこでもできる。自分が祈りやすいところを一つ拠点を決めて、そこで祈り続けていかれたらいいわけです。

それからできるだけ祈りの参考になる本をご自分で選ばれたらいい。私はサンダーシングなどとても、祈りの助けになると思って、サンダーシングの本をいつも持っています。あれは告白だから。理論を書いていない。自分の体験を、キリストとの交わりを告白してくれているから、すぐピンとくる。それから、何と言っても、新約聖書と詩篇。私はたくさんは読めない。時間がたつのです。だから、多くでなくて深く、少しでもいいから深く、繰り返し味わいながら読んでいます。皆さんそれぞれ自分でこれだと思うものを捕まえて下さい。聖書はいろいろな線を引いて、開けばずっとそこに入っているように。真っ白な聖書はいけませんよ。そんなのはよそよそしい。いろいろな色を塗って、自分の体の一部になるように、色もいろいろ、七色に塗るわけですよ。

●パウロの一切の秘訣

「されど我らの国籍は天に在り、我らは主イエス・キリストの救主として其の処より来りたもうを待つ。彼は万物を己に服わせ得る能力によりて、我らの卑しき状の体を化えて己が栄光の体に象らせ給わん」（ピリピ3：20、21）

キリストと同じみ姿に我らは変えられる。これが本当の希望なのです。肉体は衰えて行きます。幾ら頑張っても、金さん、銀さんといえども、衰えていきますよ。

「その中に何が輝いているか」



ということなのです。私が金さんで、うちの奥さんが銀さんになってもらって、

「我が中なるキリストを見よ」

と、言いたいですね。本当にそのように輝いて、もうそのうちに見えなくなりますからね、というふうな姿になりたい。

「汝ら常に主にありて喜べ、我また言う、なんじら喜べ」

主を喜びとせよ。本当に主様を喜びとする。

凡ての人に汝らの寛容を知らしめよ」（ピリピ4・4～5）

本当に主様が中に生き生きとしていたら、寛容になります。愛があふれてきます。愛の人になります。主様が自分の中に乏しくなっていると、いらいらして、何か欲求不満になってくる。

「主は近し。何事をも思い煩うな

思い煩う必要はない。

主慮り給えばなり。ただ事ごとに祈りをなし、願いをなし、感謝して汝らの求めを神に告げよ

「キリストに告げよ」です。「主さま！」と言って、祈り、願い、感謝したら、

さらば凡て人の思いにすぐる神の平安は汝らの心と思いとをキリスト・イエ

スによりて守らん」（ピリピ4・5～7）

これは本当の事実です。得も言えぬ平安に満たされる。これで良いのだと、そして、

終に言わん兄弟よ、凡そ真なること、凡そ尊ぶべきこと、凡そ正しきこと、

凡そ潔よきこと、凡そ愛すべきこと、凡そ令聞あること、如何なる徳、いか

なる誉にでも汝等これを念え」（ピリピ4・8）

ここがパウロの広やかさでしょうか。キリストオンリーと言って外のものを排斥しているかと思うと、さにあらず。この世の中の良い物はみんな素晴らしい。岩崎恭子ちゃん、素晴らしい。有森裕子さん、素晴らしい。本当に素晴らしいものは素晴らしいと、それなのです。この広やかさ、これなのです。禁欲ではありません。

「一切は捨てた。一切を失った。私はキリストだけ」

と言ってる人が芸術であれ、絵、書、音楽、文学であろうと、

「おおよそ真なるもの、本物なる物はみんな素晴らしい」

と言って、心から称えることができる。僻みはしない。

「凡そ真なること、凡そ尊ぶべきこと、凡そ正しきこと、凡そ潔よきこと、

凡そ愛すべきこと、凡そ令聞あること、如何なる徳、いかなる誉」

という、この世のものはみんな悪いとは言っていない。いっぱい美しいものがある。みんな神様の光がそこに宿っている。ただ、人間は気づかなくて、私して、歪めていられるけれども、本当に素晴らしい。音楽だって、バイオリンだって、田中嘉世姉のなざる舞踏だってそう



です。みんなそこに輝きがある。その輝きの源はどこからきているか。人は気づかなくても、夢中になっているときの姿——無我夢中といいますね——我を忘れ、無心で無欲で、そういうときに人間は素晴らしいことをする。そういう素晴らしいものは全部称えなさい。けんかしいでいい。そうしたら、本当に平和の神があなたがたと一緒にいて下さる。パウロはそのように教えているのですね。決して、排他主義ではない。禁欲主義ではない。一遍キリストの中に捨てた。しかし、それが全部豊かに返って来るのです。

「汝らが我を思う心の今また萌したるを、われ主にありて甚く喜ぶ。汝らは固より我を思いいたるなれど、機を得ざりしなり。われ窮乏によりて之を言うにあらず、我は如何なる状に居るとも、足ることを学びたればなり」（ピリピ

4・10～11）

「我ただ足るを知る」というのは童安寺でしたか、ありますね。ドイツから来られた学者の方が大変感動しておられました。ピリピ書のここに書いてあります。

「我は卑賤におる道を知り、富におる道を知る。また飽くことにも、飢うるこ

とにも、富むことにも、乏しき事にも、一切の秘訣を得たり」（ピリピ4・12）

もう実に、自由自在です。決して痩せ我慢ではありません。いつも、本当に満ち足りている。これは主キリストという素晴らしい宝を頂き、その宝が内に輝いているから、こういうふうに自由自在なのです。自分にはできることしかできないから、精いっぱいやります、ご協力いたします。でも、「どうぞ、あなたの良いようになさって下さい。この世のことに關しては私には知恵がないのですから」と。大体、私は、この世のことでは、全部人にまかせます。何においてもリーダーになろうと思ったら、それは大変なことです。もう、餅は餅屋ですから、みんな、お任せしています。

パウロの一切の秘訣は、

「我を強くし給う者によりて

我が力となり給う主イエス・キリスト、そのお方のゆえに、

凡ての事をなし得るなり」（ピリピ4・13）

それから、ピリピの人がパウロのことを助けてくれたという感謝を書きました。

「それは、何も私はして欲しいから言っているのではない。そうせざるを得ないあなたがたの心、そういう心へと導いて下さったキリスト、これを私は称えている」ということです。捧げていくということ、人を助けていくということは素晴らしいことです。そういう贈り物こそが神様への喜びの捧げ物であるのです。

「斯て、わが神は己の富に随い、キリスト・イエスによりて、汝らの凡ての窮乏を栄光のうちに補い給わん。願わくは栄光世々限りなく、我らの父なる神にあれ、アアメン」（ピリピ4・19～20）



●キリスト一切

3章から読んで来ましたが、このように本当にパウロの心は素晴らしい。そのパウロを「我は、我が主キリスト・イエスを知ることの優れたるために」

そして、

「私は一切を失いました」

と言つて、かくならしめたキリストの姿、これが今度は2章に出て来る。

「汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。即ち彼は神の貌かたちにて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんとは思わず

栄光の座を捨てて、天から下つて来られた。

反かえつて己みづかを空むなしうし僕しもべの貌かたちをとりて人の如くなれり。既に人の状さまにて現れ、

己みづかを卑ひくうして死に至るまで、十字架の死に至るまで順したがい給えり」（ピリピ2

・5～8）

この姿が今日、錦織兄が選ばれた讃美歌121番「まぶねのなかに」です。この主様の御姿を心に抱いていますならば、どうして自分を高くしていることができようか、というわけです。

「この故に神は彼を高く上げて、之に諸般もろもろの名にまさる名を賜いたり。これ天に在るもの、地に在るもの、地の下にあるもの、悉ことごとくイエスの名によりて膝ひざを屈かがめ、且もろもろの舌の『イエス・キリストは主なり』と言いあらわして、栄光を父なる神に帰きせん為なり」（ピリピ2・9～11）

それで、我々に対する勧めは

「己おのが救いを全まつとうせよ。一人ひとり自分を大事にして下さい」

と、パウロは言っています。一人ひとり大事なキリストの子供、神の子供だと。

「私がいなくても、ますます畏おそれおののきて己おのが救いを全まつとうせよ」

です。「己が救いを全まつとうする」ということは、

「キリストに在るという生き方を貫け。キリスト一切の生き方で貫きなさい」

ということですよ。

「神は御意みこころを成さんために汝らの衷うちにはたらき、汝等をして志望こころざしをたて、業わざを行わしめ給えばなり。なんじら眩つぶやかず、疑わずして凡すべての事をおこなえ」（ピ

リピ2・13～14）

あなたが為なすべきことをちゃんと示され、為すべきことに全力投球させて下さるから、

「眩つぶやかず、疑わずして凡すべての事をおこなえ」

と。「これは御意みこころだろうか、御意ではないのだろうか」と、そんなのは心配しないで良い。これは私の賜たまわりたる仕事と思えば、それを貫きなさい。もつと神に用いられる道があるのではないか、といういろいろ自分で心配しなくて良いから、今賜たまわっていることをとにかく全力投球でやりなさい。それが違っていたら、キリストが違うと示して下さい。要するに、自



分の思いというものを捨てて、本当に主様に捧げてやっていけば、道がおのずと開かれる。眩き、疑いのあるときは、本当に力が入らない。本当の打ち込みはできない。

「是^{これ}なんじら責むべき所なく素直にして此の曲^{よこしま}れる邪悪なる時代に在りて今もその通りです。」

神^{きす}の暇なき子とならん為なり。汝^{いのち}らは生命^{ことば}の言
キリストご自身であり、キリストの御言^{みことば}です。

を保ちて、世の光のごとく此の時代に輝く」（ピリピ2・15）

人は知らないようであつて、ちゃんと見ています。この世が暗ければ暗いほど、真の光は輝きます。パウロはするように、

「あなたがたが輝いてくれたら私はうれしいのだ、あなたがたを誇りとする」と言っている。

「斯^{かく}て我が走りしところ、労せしところ、空しからず、キリストの日に、われ誇ることを得ん。」

殉教がまもなくですから、

さらば汝らの信仰の供物^{そなえもの}と祭に加えて、我が血を注ぐとも

私は殉教しようとも、

我は喜ばん」（ピリピ2・16～17）

殉教のことは、テモテ書にも書いていました。

「義^{かんむり}の冠^{かんむり}が私を待っている、もう、走るべき道を走り抜いた」（テモテ後4・7～8）

ということを言っています。だから、パウロはいつも自分を捧げきっています。ピリピ書1章23節でも、

「どちらかといえば、私は早くキリストの御許^{みもと}に行きたい。けれども、こうして地上にすることがあなたがたにプラスになるならば、地上に止^{とど}まつても良いよ」

ということを言っています。

「我にとりて、生くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり。……わが願ひは世を去りてキリストと偕^{とも}に居らんことなり」（ピリピ1・21～23）

そう言っています。だから、完全に地上の生命^{いのち}ということには、パウロは囚われていません。それでいながら、いわゆる世捨人^{よすてびと}、厭世人^{えんせいじん}ではないのですね。実に豊かです。こういう豊かな生き方を目指して進みたい。だから、私は「人生の原点」と今日題してお話した次第です。それではこれで終わりいたします。

「奥田昌道先生講筵6『人生の原点』1997年9月6日京都キリスト召団発行より転載」

